

第49回超音波ドプラ・新技術研究会 肝疾患における超音波医療の最前線

造影超音波を施行し得た 肝血管肉腫の1例

1)愛媛県立中央病院 消化器病センター内科、2)愛媛県立南宇和病院 内科、3)愛媛大学大学院 消化器・内分泌・代謝内科学

多田藤政¹⁾、平岡 淳¹⁾、大濱日出子¹⁾、野間章裕^{1,2)}、越智麻理恵¹⁾、
柳原映美¹⁾、加藤雅也¹⁾、二宮朋之¹⁾、小泉洋平³⁾、廣岡昌史³⁾、日浅陽一³⁾

肝内多発腫瘍で紹介された50歳代男性。造影超音波検査(CEUS)で、動脈優位相で辺縁及び中心部が濃染、門脈相で中心部の濃染持続、周囲実質と同程度の造影効果がみられ排水路が描出され、後血管相で欠損像を呈した。腫瘍生検にて肝血管肉腫と診断した。CEUSを施行し得た肝血管肉腫の報告は稀であるため報告する。

A 50-year-old man was referred for multiple intrahepatic tumors. In the contrast-enhanced ultrasonography (CEUS), the peripheral of tumor was revealed as irregular hyper-vascular in the early-vascular phase, and thick ring enhancement in the late-vascular phase, and a defect image in the post-vascular phase. A drainage vessel was detected in the late-vascular phase. Finally, tumors were diagnosed as hepatic angiosarcoma by liver biopsy.

はじめに

肝血管肉腫は類洞の内皮細胞に由来する非上皮性の腫瘍であり、肝原発悪性腫瘍の1.8%と稀な腫瘍である¹⁾。そのため腹部造影超音波(CEUS)所見の報告は少ない。今回CEUSを施行し得た肝血管肉腫を経験したので文献的考察を加えて報告する。

症例

50代、男性。健診の腹部超音波検査で肝内に多発する腫瘍を指摘され、当科紹介受診となった。

既往歴：C型慢性肝炎に対してインターフェロン治療でウイルス学的奏功(20

歳代)。

家族歴・嗜好品：特記すべき事項なし。

身体所見：脈拍87/分・整、血圧134/88 mmHg、体温36.4℃、意識清明、眼瞼結膜貧血なし、眼球結膜黄染なし。心雑音なし、不整なし。腹部平坦かつ軟、圧痛なし。波動なし。両下肢浮腫なし。

血液生化学的所見：HCV抗体陽性、HCV-RNA検出せず。HBs抗原、自己抗体陰性。PT 92%、血小板 $19.3 \times 10^4/\mu\text{L}$ 、AST 18U/L、ALT 14U/L、総ビリルビン0.7mg/dL、Alb 4.7g/dL、AFP 3.2 ng/mL、PIVKA-II 28mAU/mL、CEA 1.2ng/mL、CA19-9 2.1U/mL。

肝臓ダイナミックCT：早期相にて辺縁及び中心部が濃染、平衡相で造影効果が遷延する肝内多発腫瘍がみられた。

腹部超音波検査所見：肝両葉に多発する境界明瞭、辺縁不整、内部不均一な低エコー腫瘍がみられた(図1a)。

腹部造影超音波検査(CEUS)(ペルフルブ

タン(ソナゾイド)0.5mL投与)：動脈優位相(図1b)で辺縁及び中心部が濃染、門脈優位相(図1c)で中心部の濃染持続がみられ、同時に排水路(図1c矢頭)が描出された。後血管相(図1d)で淡い欠損像と不均一な染影像を呈した。

FDG-PET CT：肝内結節のSUVmax1.9、複数の腹腔内リンパ節(#8、#12)にFDG取り込みの亢進がみられたが肝臓以外の他臓器に原発巣となる病変はなかった。

超音波ガイド下腫瘍生検：結合組織増生を伴いながら血管を形成する異型細胞がみられ、CD31陽性、D2-40陰性、Mib-1弱陽性であった。血管内皮マーカーであるCD31陽性であること、組織像で類上皮血管内皮腫に特徴的な線維化がみられず、D2-40陰性(図2)。肝血管肉腫と診断した。